



## 人間自身の、その精げられた精神の究極のミクロの原理である言霊布斗麻邇を用いなければならない時が来た。

言霊布斗麻邇は観念ではない。現在の世界では、思想だの、主義だの、教理教義だの、イデオロギーだ、洗脳だのと、ぎこちない観念の型を以て生命を拘束し、自由を剥奪し、人間を奴隷にし、或は精神的な魔薬を用いて中毒患者にして支配しつつあるのであるが、老子は「名の名とすべきは常の名に非ず」と説いて、あらゆる常の名である観念、教義等を否定して、言霊麻邇の存在に導いて呉れる。

人類の大義名分が抛って来るところは「忠君愛国」とか、「世界平和」とか、「プロレタリア独裁」等々と云う様な固定した観念の型やお題目ではなく、人間の生命が自我自体を刹那々に自覚し把握し表現し規定する清淳な言語の原律であって、これが言霊である。何者の哲学を学ぶことも、何者の主義を担ぐこともなく、

何者の宗教を信じる必要もない。今此処に生きている人間各自の、汝みずからの生命の智慧のひらめきそのものが恒常不変、共通普遍、天壤無窮、万世一系の自己と人類の文明の最高の指導原理である。人類の真理は自分自身の内奥に存在し本具されている。

常の名のあらざる、名の名とすべき真の名である言霊は仮初<sup>かりそめ</sup>の名ではない。方便ではない。他の目的のために用いる道具としての思想ではない。事物の把握と行為の軌跡の淵源としての真奈（真名）であり、真言でありMannaであり、摩尼である。全人類の真の大義はすべて此の人間自体の真言より発現し、その名分はこれに則って定まるのである。

ミクロ宇宙の究極に肉迫した科学（理論物理学）文明の世界は、三千年の罪穢れを曳きずった、中途半端な

断片的な主義や思想や信仰ではもはや経営不可能である。然し世界の学者や宗教家と政治家が迂愚にして怠惰で、歴史の進歩に追い付かぬために、此の不可能に気が付かぬ間は、何時までも再現なく人類の生命の浪費と犠牲が繰返されて行く。だがその三千年来の所謂ユダ（悠紀田）の思想の踏襲輪廻流転としての経営による世界は急速に崩壊しつつある。全人類が、全世界がその人間自身の精げられた精神の究極のミクロの原理である言霊布斗麻邇を用いなければならない時が来た。「生命の樹の葉万石の民を医すべし」（黙示録）。切羽詰まった終末の世界の混乱を整理し救済し解決する唯一の道は此処にある。此の精神と物体の二つのミクロの原理のジン・テーゼが間もなく宇宙に実現する人類の第三文明である。（昭和四十四年十二月、第三文明五〇号）